

1 開 会

2 教育長挨拶

3 議 事

(1) 宇陀市学校適正化の基本的な考え方について

○OPTAを代表する委員からの報告

- ・自然豊かなエリアなので農業、林業の体験ができる学校を考えてもらいたい。宇陀の魅力、特色生かした授業を実現することで、移住を希望する人も増える。(大宇陀地域PTA)
- ・小中学校を義務教育学校にし、小学校から教科担任制を導入してもらいたい。また、既存の学区の枠組みを見直してもらいたい。少人数のよさもあるが、子どもたちが色々な友達と関われる人数の保障も大切だと考える。(菟田野地域PTA)
- ・成長期に多くの人と接することで、多様な考え方が身に付く。クラス替えができることで、人間関係のトラブルがあった場合の対応が可能になる。一方で、少人数であれば、子ども一人一人に行き届いた教育が可能となる。(榛原地域PTA)
- ・今以上に通学時間がかかると、朝は早く、夕方は遅くと子どもたちの体力的、精神的な負担となる。地域性を生かした小中一貫校などの設置も検討してはどうか。(室生地域PTA)

○地域住民を代表する委員からの報告

- ・学校は地域存続のためにも是非残すべき、そのために特色ある教育づくりが求められている。(大宇陀地域自治会)
- ・小学1年生から4年生までを学級担任制にし、5年生から中学3年生は教科担任制とする小中一貫校としてはどうか。人数だけで学校の存続を考えるのではなく、できるだけ地域に一つは学校を残す形で話を進めてもらいたい。(菟田野地域自治会)
- ・小さい学校は、小さい学校としての特色を生かした方がよい。(榛原地域自治会)
- ・学校がなくなると地域への愛着が薄れ、そのことが地域を離れる原因になる。地域では地域活性化を目的としたNPO法人を立ち上げている、学校がなくなれば活動に水を差すことにもなる。(室生地域自治会)

○教職員を代表する委員からの報告

- ・たくさん友達と過ごすことで、多様な考えに気付いたり、我慢したりする力などが身に付き、友達同士が刺激を受けて成長する姿が見られる。統合した幼稚園の子どもからは、友達が増えてよかったという意見が聞かれる。一方で、最近の職員のオーバーワークぶりを見たとき、少人数のほうが豊かな教育を進めることができるといった一面もある。(幼保こ教職員)
- ・学校は地域コミュニティの一翼を担っており、地域から学校がなくなることは、地域の文化がなくなり、ますます少子化が進むことになる。(小学校教職員)
- ・子どもの数の減少に伴い、集団の中で養われる生きる力が育ちにくい。一方で、地域から学校がなくなると、地域の特色を大切にする教育活動が難しくなる。学校のない地域には子育て世代の移住も見込めない。(中学校教職員)

○意見交換

- ・全国的に人口が減少する中で、コスト面もしっかり考え、子どもたちの世代に問題を先送りしないような学校の在り方を考える必要がある。
- ・学校は地域コミュニティの核である。単に人数だけで学校の在り方を検討すべきでない。
- ・今、学校に通っている子どもたちにも意見を聞いてはどうか。
- ・論理(数)と感情(地域コミュニティの核)の両方の観点で議論を続けていく必要がある。

○まとめ(委員長)

- ・本日出された報告や意見をまとめると、委員会としては今後も「特色ある学校づくりをすることで、適正な規模を維持できない学校を存続させることも含めて考えていく」ことも視野に入れて、将来の学校の在り方を検討していくことが適当だと考える。

(2) 今後の予定について

○資料に沿って説明(垣内主幹)

- ・現存する市内6小学校のうち榛原小を除く5校が平成18年以降に学校適正化を図っており、そこからちょうど15年後の今、再度適正化を検討している現実を踏まえると、15年くらい先を見通して適正化を考える必要がある。
- ・次回の第3回推進委員会では、本日の話し合いを踏まえて「宇陀市学校適正化基本方針(案)」を最初にお示しする。その後の審議は、まず、10年、15年後の宇陀市全体の学校数や学校の在り方について、委員の皆さんのご意見を伺いたい。

(3) その他

4 連絡事項

5 閉 会